油絵を応用したグラフィックデザイン

Graphic Design with Oil Painting

■ 楊 令傑　Yang Lingjie

愛知県立芸術大学大学院　今尾泰三研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：油絵、表現、ポスター

はじめに

現代のグラフィックデザインでは、パソコンで作成された図形イメージが日常的に利用されている。本研究では、デジタル技術に過度に頼ることなく、自分が学習した油絵の物質感が持つインパクトの強い表現方法を応用し、ポスターに活用することを目指している。

先行研究（図1）では、大胆で直接的な表現を採用した。引き続きこの手法を用いながら、ポスターや現代のグラフィックデザイン表現に新たな可能性を見出すのが本研究の目的である。

図1 「雲南省・1、2」 2017年作 400mm×600mm

1. 基礎研究

1.1. イラストレーション表現

グラフィックデザインは、言葉とイメージを結合し、伝達すべきメッセージを視覚化する造形行為である。また、その中でポスターは注目を集めて、情報を伝えることがポスターの役割である。通りすがりにポスターを目にする時間は2から3秒程度，メッセージを伝達するため、インパクトを与える必要がある。

1.2. フォーヴィズム表現

フォーヴィスムは1900年ごろから現れ、1910年ごろまで続いた。フォービスム運動のリーダーは、アンリ・マティスとアンドレ・ドランだった。マテイスは、物の具体的な形を表現するのではなく、抽象的な形を表し、純色（各色相において、最も彩度が高い色）を使っているのが特徴である（図2）。

現代のグラフィックデザインで本研究が参考とする作品には、葛西薫の「広島アピール2013」がある。平和を希求するという重厚なテーマだが、単なる平和の象徴ではなく、自由に生きる人間や人生の未来への希望などを表現している、このポスターのシンプルながら力強い表現は、マティスに共通する洗練された表現になっている。

図2 参考作品 アンリ・マティス 「Large Reclining Nude」
アンリ・マティス 「ジャズ」
葛西薫 「広島アピール2013」

2. 2020年次試作

2.1. 油絵を応用したポスターデザイン

段ボールの無駄使いに対する啓蒙メッセージを擬人化して表現した。題して「Less Waste, Save Money」（図3）である。このポスターでは、見た目は強いが中身が弱い人間、つまり見かけ倒しの人というテーマでキャラクター化している。中国では、胡桃と脳みそがよく似ているので、胡桃を食べることは脳に良いという説がある。胡桃のイメージを使って、少しユーモアのあるアイデアを表現した。

後期では、「見えない手」、「Man－eating Man」などのポスターを制作した。いずれも油絵の具を使った作品である。「見えない手」は、ある人が見えない手に抱きしめられているイメージを表現した。「Man－eating Man」は、社会に存在する様々なハラスメント問題テーマとして制作した。

図3 「Less Waste, Save Money」 B1サイズ
「見えない手」 B1サイズ
「Man-eating Man」 B1サイズ

3. 2021年次試作

2021年次では、主に「Shall We Help」(日本語訳:「支え合おう！」、図4)を中心に研究を行った。現在の世界は、新型コロナウィルスによる前代未聞の変換期になっている。こうした激動期にあり、毎日不安と憂鬱を感じる人々に、力を与えたい。

作品のサイズはB1である。まず実際に絵を描いてパソコンに取り込み、加工していった。また、広告制作会社のインターンシップに参加した際、「パンフェス・イン・ナゴヤ」という架空のイベントポスターを課題として制作した。油絵のタッチをシミュレートして、イメージを制作した。作品のサイズはA3である。制作手法は「Shall We Help」と少し違って、パソコンでそのまま油絵の質感をシミュレートした。

図4 「Shall We Help」 B1サイズ
「パンフェス・イン・ナゴヤ」 A3サイズ

4. 修了制作のアイデア

4.1. 方向性

新型コロナウイルス感染症の世界への蔓延は、人々に公衆衛生上の脅威を与えるだけではなく、人の移動と接触を制限することによる経済的な打撃をも与えている。これだけの大きな災害は、人々の価値観と社会のありようを変化させる可能性があるだけではなく、これまでの習慣や常識を吹き飛ばすものだ。

グラフィックデザインに油絵の様式、バランスなどの芸術的特性を加えると、グラフィックデザイン作品全体に豊かな視覚効果が加わり、作品の内容もより多様なものになる。グラフィックデザインにおいて油絵の形式美をよりよく発揮するため、デザイナーは油絵が持つ文化的属性と芸術的特性を応用すれば新たな表現方法が広がると考える。前者は視覚的に認識しやすい、理解しやすい、後者は柔軟で革新的である。

2021年東京オリンピックのボランティアの経験から、人との交流は大事だと改めて認識した。修了制作は、人と人の関係やより良いコミュニケーションについて、メッセージを発信する。B1サイズのシリーズポスターを8点製作した(図5)。2021年度前期に試作した「Shall We Help」を原点として展開し、文化の境界を越える共通のイメージ表現を目標とする。

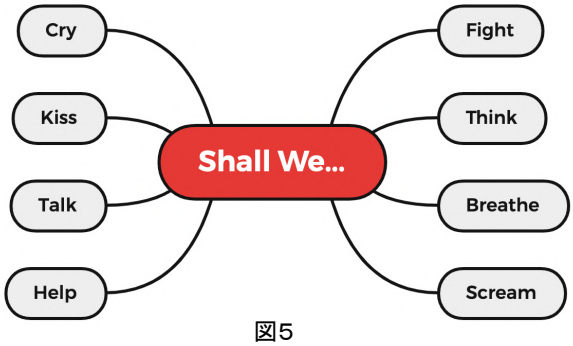

図5

4.2. テーマ解説

「Shall」とは、話者の意向を表す助動詞である。「Shall we」は話し手と聞き手両方が何かをすることについて「〜しましょうか」と提案している。修了制作で「Shall we…」をテーマにしたのは、「Shall we…」は直接でわかりやすいフレーズだと思うからだ。積極的な態度も含めている。これらのメッセージを油絵で表現していく。

4.3. 作品解説

Shall We Cry(図6):「泣こう！」という意味である。今の人は人前で感情を出すことがなかなかできない。泣くこともコミュニケーションの一つである。「きちんと相手に気持ちを伝えて、感情を出す」というメッセージを伝えている。女の子が号泣しているイメージを表現した。油絵で女の子を描き、画像処理で回転の効果を加え、溢れる涙を描いた。

図6 「Shall We Cry」

Shall We Kiss(図7):「キスしよう！」という意味である。新型コロナウイルスの感染拡大は、人間関係の距離感が遠くなっている。「愛する人を愛しましょう！」を発信した作品である。油絵イメージで鼻と口を描いた。作品の面白さや豊かさが増え、二つの口を重ねて「キス」という行為を表現した。

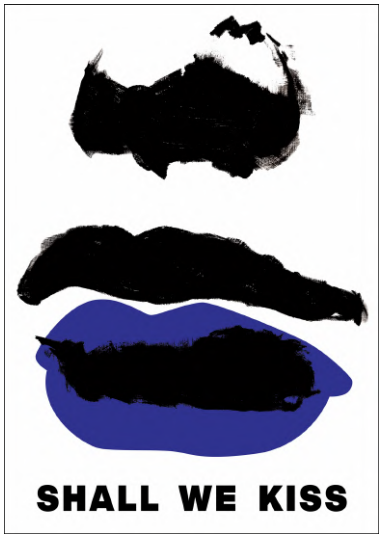

図7 「Shall We Kiss」

Shall We Talk(図8):「話そう！」という意味である。「話し合い」とは、相互に話すことは一方通行ではない「双方向のコミュニケーション」が重要であるという意味を伝えている。

会話を表現するために、青い人と、紫の人を描いた。ただし、会話だけではなく、少しケンカをしているような表現を含めている。他人とのコミュニケーションの中には、言い争うこともコミュニケーションの一つと考えるだからだ。「ケンカになってもいい、人と話すことが大切だ！」という思いを込めている。

Shall We Fight(図9):「戦おう！」という意味である。人権問題、言論の自由、人種差別など、この世は色んな理不尽な事がある。「こうした不合理に屈してはいけない。」ということを伝えたい。油絵の具でシンプルな「拳」を表現した。

図8 「Shall We Talk」
「Shall We Fight」

Shall We Think(図10):「考えよう！」という意味である。詰め込み教育は人の想像力や思考力に害がある。「詰め込み教育反対、自分の考えを持とう！」という考えを世間に伝えたい。パックジュースのイメージをたくさんコピーした。パックジュースは量産され、コンビニやスーパーで並んでいる様子は印象に残る。

このイメージは、詰め込み教育を受けた若者を象徴している。誰もが自分の考えがなく、個性がなく均質であることを表現している。

Shall We Breathe(図11):「息をしよう！」という意味である。内閣府の調査によると、日本国内の40～64歳の中高年の引きこもりは約61万人である。引きこもりは深刻な社会問題になっている。このポスターは「外に出て、息をしよう！」というメッセージを世間に伝達したい。

画像の左下には、空間にうつ伏せている人が描かれている。彼は非常に長いテーブルで一息ついている、その上と右側にはが何も描かれていない。空間の大きさによって、見る人の想像力を膨らませる。

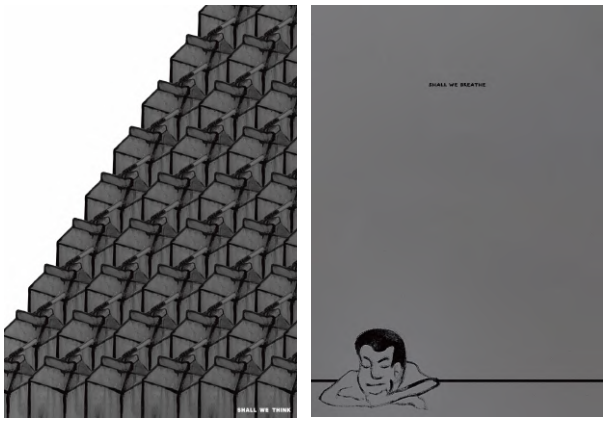

図9 「Shall We Think」
「Shall We Breathe」

Shall We Scream(図12):「叫べ！」という意味である。この叫びは、恐怖や血が騒ぐ叫びではなく、戦争被害者の悲鳴である。平和の希求を表している。

楕円で叫びを表現してみた。一見、シンプルな楕円の真ん中を白く塗色することによって、大きく口を開けている人をイメージした。

図10 「Shall We Scream」

Shall We Help(図13):「支え合おう！」という意味である。コロナの中、人間同士は支え合い、助け合うべきである。

二人の人物が描かれている。油絵に使われたオイルの痕跡を残し、涙、あるいは血のイマジネーションを生み出す。人間は助け合うことを知っているからこそ人間なのだと思うし、特に新型コロナウイルス感染が拡大している今、さらに助け合わなければいけないと思う。

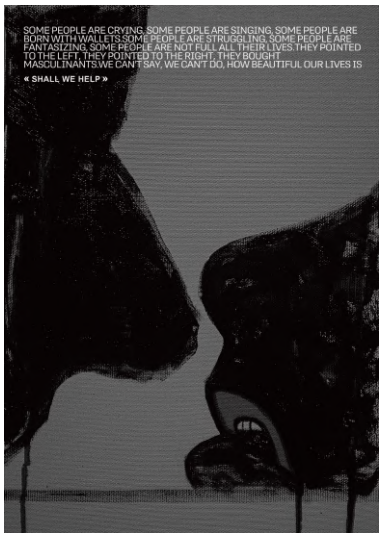

図11 「Shall We Help」

4.4. 表現に合わせた書体

より良い効果を得るために、ポスターに使われている書体の推敲も行った。イメージと書体のバランスを考えると、ゴシック体の簡潔さはシンプルな油絵表現とふさわしいと考える。

作品の普遍性や共通性を考えた上、「Helvetica Now Display」という現代的な、よく知られている書体を選定した。さらに書体の形とレタースペーシングを調整した(図14)。

図12 書体の調整

終わりに

油絵が持つ肌合いや、質感、量感やマチエールは、広告との組み合わせにおいて侮れない存在だろう。本研究では、これを出発点として、油絵とデザイン技法を組み合わせ、「Shall We…」というタイトルで8つのメッセージポスターを制作し、グラフィックデザインにおける油絵技法の実用性を技術や応用の両方から探ったものである。

タイポグラフィとの組み合わせにより、より良い効果を得ることができれば、グラフィックデザインに適用した表現力やインパクトが期待できる。グラフィックデザインへの応用を推進するには長い道だが、この研究が多くの人々に影響することを期待したい。

注、引用

1) 新島実、『視覚伝達デザイン基礎』、武蔵野美術大学出版局、2004年、PP. 63～64

他参考文献

・ フィリップ・B・メッグズ、『グラフィック・デザイン全史』、淡交社、1996年
・ 筧菜奈子、『めくるめく現代アート』、フィルムアート社、2016年
・ JAGDA、『デジタルメディアと日本のグラフィックデザインその過去と未来』、誠文堂新光社、2017年
・ 愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン領域、『愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン領域 研究報告集 2020 Vol. 16』、愛知県立芸術大学、2021年
・ 講談社、『広告批評 No. 238 多田琢大研究 対談:多田琢×大貫卓也』、講談社、2000年
・ 葛西薫、『KASAI Kaoru 1968』、ADP、2010年
・ 鈴木哲、『ディック・ブルーナのすべて』、講談社、2018年
・ 松田行正、『独裁者のデザイン』、平凡社、2019年
・ 岡崎乾二郎、『抽象の力:近代芸術の解析』、亜紀書房、2018年
・ 仲條正義、『印刷された仲條』、リトル・モア、1997年
・ 小泉均、『タイポグラフィ・ハンドブック』、研究社、2012年
・ 仲條正義、『仲條NAKAJO』、ADP、2021年
・ 河村彩、『ロシア構成主義:生活と造形の組織学』、株式会社共和国、2019年
・ デザインノート編集部、『デザイン配色解剖』、誠文堂新光社、2021年